

平成 22 年 5 月 27 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520227

研究課題名 (和文) ベルギーにおける地域ナショナリズムと芸術文化環境の変遷

研究課題名 (英文) Changes in Regional Nationalism and Situation of Arts in Belgium

研究代表者

岩本 和子 (IWAMOTO KAZUKO)

神戸大学・大学院国際文化科学研究科・教授

研究者番号：60203410

研究成果の概要 (和文)：ベルギーの地域ナショナリズムの最新の実態を、芸術文化環境と創造活動の歴史と現状を踏まえて研究し、今後「多文化共生」の叫ばれる世界の中で、独自の民族的アイデンティティを維持しつつ、どのように芸術活動が機能し、国家／地域体制と関わっていくのかを考察した。そのために各地域・都市の芸術文化活動、芸術家、彼らの作品などの足跡と相互影響関係、それらの現在のイメージや役割などを調査しまとめた。

研究成果の概要 (英文)：We studied the most recent aspects of the regional “nationalism” in Belgium, based on the history and the actual situations of artistic and cultural environments and of creative activities. We also examined how the arts, keeping their original ethnic identities in today’s general tendency to respect the “multiculturalism”, function and concern with the system of Nation or Regions. For that purpose, we researched, in Belgian areas and cities, artistic activities, artists and their works and tried to follow their traces and mutual influences from the point of view of regional identity. We analyzed them and organized into papers.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：ベルギー 芸術文化環境 地域ナショナリズム 多文化共生 フランス語文学

1. 研究開始当初の背景

文化の多様性を標榜する EU において、その象徴的な国家とも言われ、本拠地を首都ブリュッセルに持つベルギーは、小国ながら多

言語・多文化共存のモデルと見なされている。しかし 1830 年の独立以来、フランス語圏／オランダ語圏、ワロン／フランデレン地域・民族の間での「言語戦争」と共に政治体制も

芸術文化活動も歩んできた。申請者は、ヨーロッパの仏語圏地域研究、特に上記のような多言語・多文化が共存するベルギー文化の「中心」「周縁」概念とアイデンティティ確立の問題についての考察を課題として、19世紀から現在に至る芸術・文化の諸相の研究を続けてきた。その一環として、本研究開始時までは、ベルギー独立前後のロマン主義的国家主義、アカデミー設立、そして19世紀末から20世紀初めにかけて他国にも大きな影響力を持った象徴主義の時代に特に焦点を当て、政治体制や社会的背景の変化と芸術文化の創造活動の変遷について、文学作品や美術作品、当時の文芸雑誌や新聞などを資料として分析・検討してきた。

また、以上のような文学・芸術作品の分析や芸術文化活動の歴史の変遷の研究を踏まえ、同様の研究対象を20世紀の芸術文化活動にまで広げて進めると同時に、創作活動を支える芸術文化環境、すなわち国家や地域単位での文化政策、企業や民間も含めた公的援助や助成システムの歴史の変遷と現状も調査・研究し、多言語・多文化を擁する連邦国家ベルギーの芸術文化のあり方を多角的な視点から捉えてきた。その結果、19世紀の「向心性段階」から両大戦間における大国への「遠心性段階」を経て、1970年代からの地域主義による「弁証法的段階」、連邦制移行後の多様性の尊重への変遷をたどり、この国の文化状況の特殊性と意義を探ることができた。

2. 研究の目的

ベルギーの「言語戦争」は現在解決を見るところか、EUという大きな枠の中で、他諸国同様にむしろ地域や民族単位での「ナショナリズム」が激化し、極右政党も台頭してきている。世界的なグローバル化の中における民族・地域主義の顕在化の1つの象徴的な場として、ベルギーの地域ナショナリズムの最新の実態を、芸術文化環境と創造活動の歴史と現状を踏まえて考察し、今後「多文化共生」の叫ばれる世界の中で、独自の民族的アイデンティティを維持しつつ、どのように芸術活動が機能し、また国家／地域体制と関わっていくのかを考えるのが、本研究の目的である。これはベルギーにおけるフランス語文学、芸術文化政策の変遷と現状などに関する研究成果を踏まえたものでもある。今回はさらに具体的に、各地域・都市（オランダ語圏も含む）ごとに、独立以来のベルギーの文学や舞台芸術（演劇、オペラなど）といった芸術文化活動の環境、芸術家（ベルギー人に限らずフランス人、ドイツ人、その他ヨーロッパ人）、彼らの作品などの足跡と相互影響関係にも注目した。そして、こういった蓄積を踏まえた上での現在の、それらのイメージや役割、

実際の芸術文化活動への反映などを調査し解明していくことを目的とする。

3. 研究の方法

(1) ベルギー各都市の地理的・文化的特徴に注目しつつ、ベルギーはもちろん、フランス人やヨーロッパ各国の知識人、作家、芸術家たちの創造活動との関わりを詳細に調査し考察する。小国でありながら三層構造の連邦制という特異な政体を持つこの国の文化は、複数の民族アイデンティティの確立と同時に、多文化の交差点としての国際性をも意識しつつ、現在では文化共同体と連邦政府によって制度的な保護の努力がなされている。それらの活動機構は紆余曲折を経ながらも整備され潤沢な助成を行いながら、多様性の重視とともに伝統的芸術の保持、新たな創造活動の促進を積極的に行なっている。国家ではなく地域性を重視した芸術文化のあり方を具体的に把握するために、文化の諸中心地とも言える都市という単位に注目することにしたのである。具体的には、民族意識や言語、歴史、現状の諸問題を抱える各都市において、芸術家たちがどのような関わりを持ち、どのような足跡を残し、また諸作品の中でどのようにそれらの都市文化を捉えてきたのかを明らかにする。そのために、対象地域も申請者のこれまでの研究におけるベルギーのフランス共同体（フランス語圏に相当するブリュッセル首都圏とワロン地域）に限らず、オランダ語圏のフランデレン地域の各都市に広げる。そしていまだに知られざる不思議の国ベルギーの国家体制の複雑さ、ベルギー人のナショナリズム意識、アイデンティティ意識の多様性や「無国籍性」、存在自体の危うさに至るまで、文学・芸術的な視点から浮き彫りにすることで、その諸特質を解明していく。

(2) 各地の文化施設（地域／共同体政府の文化省、劇場、ホール、文化センター、図書館など）の姿勢や活動の実態を通し、地域・都市ごとに過去・現在の芸術家や芸術作品がどのような影響やイメージを残しており、それがどのように実際の芸術活動や運営方法、人々の反応に反映されているかを探る。その結果、北、南、首都圏の対比、＜地方＞からの目を通して、今後のベルギーの芸術活動、ひいては体制や、広く「多文化共生」の進む方向を見極める。

4. 研究成果

(1) ベルギーの言語・民族・多文化状況に関する文献、文学・芸術文化関係の文献、各都市の歴史や現状についての文献を収集分析・検

討した。

(2) 科研費旅費により、9月と3月にベルギー各都市の現地調査を行い(2007年9月、2008年3月、2009年3月、2010年3月)、芸術文化環境の歴史・地理的背景、制度面や文化政策の実態、文学者や芸術家の足跡を確認した。訪問地はブリュッセル、オステンド、ブリュージュ、ナミュール、リール、ヘント、リエージュ、シャルルロワ、ハッセルトなどの大学・文化施設である。また研究者・芸術関係者たちとの意見交換も行った。

(3) 以上の文献や現地調査について考察をまとめた。

① ワーテルロー：ラテン／ゲルマン世界の境界に位置し、ワーテルローの戦いの舞台はナポレオン帝国崩壊とヨーロッパの国民国家形成のきっかけともなった。この場所を、ユゴー、スタンダールなど多くの作家や芸術家が創造の源としており、イメージの集約点としてのこの地の意味を明らかにした。

② コルトレイク：フランデレン民族主義の象徴的中心地で、1302年の「黄金拍車の戦い」でフランス軍に対して勝利をおさめた舞台でもあり、過去の栄光の歴史を守りその記憶に生き続ける街だが、それは19世紀独立直後の歴史小説『フランデレンの獅子』によって創られたイメージにもよるものであることを詳察した。

③ ダム：ブルッヘ近郊の小都市だが、19世紀に書かれ、16世紀のスペイン支配からの独立運動を題材とした国民的小説『ティル・ウーレンシュピーゲル伝説』の舞台である。創造された物語と人物たちに基づくこの土地の象徴性と民族意識を探った。

④ ブルッヘ：特に19世紀末、フランス人にとっての異国情緒あふれる北方の街としてローデンバックの小説や画家たちに描かれて「死都」のイメージを定着させた。ユルスナールなどゆかりの作家も多いが、それらをもとにこの街のイメージと現実、芸術家にとっての意味を探った。

⑤ アントウェルペン：ワーグナーの楽劇『ローエングリン』でゲルマン世界の辺境として描かれたこと、またイギリスの作家による『フランダースの犬』で日本とアメリカでのみ知られるネロの物語とルーベンスの関わりな

どをもとに、この地の歴史と芸術的イメージを考察した。

⑥ その他ナミュール、ブリュッセル、リエージュなど他都市についても資料を分析している。

(4) 19世紀ベルギーの文学活動にも影響を与えた作家スタンダールの著作、評伝翻訳、論文を出版し、研究発表も行った。

(5) ベルギー文化に関する研究会を立ち上げ(「関西ベルギー研究会」2007年5月) サイトを作成、ベルギー文化に関する情報交換や情報発信、1、2カ月に1度のペースでの研究会開催を続けている。

(6) 国内外における位置づけとインパクトについて：ベルギー独自の文化を見直す研究は自国においてさえまだ数少ないが、最近ようやく関心が高まって著作も出始めた領域である。ベルギー(特にフランス語圏)における文学や芸術に関する研究は主にフランスに向けられてきたからである。都市と文化の関係といった芸術文化環境に関する研究も、学問としてはフランスに大幅に遅れをとっており、ほとんど未開拓領域である。近年、「ベルギー文学」をタイトルに掲げる、ベルギー人執筆者による文学史・芸術関係研究書が相次いで出版されている。フランス語、オランダ語とものである。しかしその際の「ベルギー文学」の範囲はいまだに曖昧で、フランス語／オランダ語で書いた作家はすべて(外国人や移民も)含めるものから、「ベルギー」の土地に根ざした、両言語の作家や漫画、映画監督などまで含めるものなど、枠は揺らぎ続けている。地域や民族主義に関する著書出版も増え、かつての「国民文学」(19世紀のド・コステルやメーテルリンク、ローデンバックなど)の新版や研究書も増えてきている。これらの現象も踏まえ、歴史的変遷と現在のベルギーの芸術文化環境を通した「地域・民族主義」のあり方や意味を外からの客観的な目で捉え直すことには大きな意義がある。現在、「クレオール」「マグレブ」などの概念によって新たな生き方、すなわち言語・文化的融合からの全く新しい創造的な文化を見直す動きが盛んになってきている。ベルギーの状況は、諸民族の性質の根底的な近さや経済的な豊かさのためか一見目立たないが、同様の文化的アイデンティティに関する切実さは確かに存在する。そしてフランス、ドイツといった「中心」文化を攪乱し活性化する必要

不可欠な役割を担ってもいるのである。

(8)今後の展望について:本研究の成果を踏まえてのベルギー諸都市と文学に関する著書出版は期間中にできなかったが、今後さらに数都市に関する考察をまとめて実現させたい。また本研究期間中に立ち上げて現在30人以上の組織となった関西ベルギー研究会での学際的研究をさらに発展、活発化させて日本におけるベルギー文化研究に寄与したい(論文集、文学作品翻訳の出版などを考えている)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①岩本和子「都市と文学-コルトレイクと『フランデレンの獅子』」EBOK (神戸大学仏語仏文学研究会)、査読無、19・20号、2008、pp. 215-228

他2件

[学会発表] (計2件)

①岩本和子「フランス語のベルギー文学」日本フランス語フランス文学会 2008年度秋季大会、2008.11.9、岩手大学

他1件

[図書] (計3件)

①岩本和子『スタンダールと妹ポーリーヌ—作家への道—』青山社、2008、288

②岩本和子『周縁の文学—ベルギーのフランス語文学にみるナショナリズムの変遷』松籟社、2007、407

③ヴィクトール・デル・リット (鎌田博夫・岩本和子訳)『スタンダールの生涯』法政大学出版社、2007、339

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩本 和子 (IWAMOTO KAZUKO)

神戸大学・大学院国際文化科学研究科・教授
研究者番号: 60203410